

ただ煙を肺に入れたいだけ

白い服を着た髪の毛の長い彼女は
生きる事に異常に執着しながら、
死を夢見る人間です。

彼女はあの人に会いたくて旅に出ました。
あの人顔も忘れてしまったのに。
あの人にただただ、
会いたくて会いたくて。
その気持だけで。
彼女の心にプスッと細い針が刺さり
その穴から真っ黒な絵の具が
彼女の心に染み渡る前に。

裸足でひたすら
夜の森をフラリフラリ。
月も見て見ぬフリ。

大丈夫。
心配する事はなにもない。
孤独や寂しさから
必ず守ってあげる。
いつでもいつまでも
ずっとずっと一緒にいてあげる。
だから怖がらないで。
心配する事はなにもない。
心配する事はなにもない。

それは
彼女があの人から言われた言葉なのか。

彼女があの人から言って欲しかった言葉なのか。
彼女にはもう思い出せません。

誰かが言いました。

「あきらめちゃえばいいのに。」

「何を？」

「全てを。」

そして彼女は煙草に火をつけます。

火をつけて

吸う。

たったそれだけ。

そして全ては溶け出します。

ゆっくり

とろとろ

静かに

とろとろ

なみだがこぼれ落ちる程に
やさしく。

森も

月も

彼女も

あの人も

たったそれだけ。

二人だけが死ねる場所

綺麗な海が見渡せる丘。
二人だけの秘密の場所に、
手をつないで行くの。

夕日が海に溶けてゆくのを見ながら、
もしも私があなたに

「一緒に死んじやいたいね。」

って言ったら、

あなたはきつと何も言わず

ただ黙って

やさしく微笑むんだらう。

あなたならきつと、
きつとね。

あなたが

「僕は幸せにはなれない。」

そう言った時、

「私も同じよ。」

そう言って泣いた。

でもあの時本当は、

私は救われていた。

綺麗な冷たい目をしたあなたを
助けてあげたかった。

悲しく笑うあなたを
守ってあげたかった。

本当は何も信じていないあなたに
私を信じて欲しかった。

ねえ

一緒に死んじやおつか。

愚かな女の叶わぬ願い

じゃああんたが私の人生代わりに生きてよ

昔、誰かに言おうとして

やめた言葉。

自分の愚かさを

実感してしまうから。

私はある夜、自分が花畑にいる夢を見た。

色とりどりで

それはそれは綺麗な花たち。

空は青く澄んでいて、雲ひとつない。

小鳥のさえずりさえ聞こえる。

日の光のあたたかさに触れながら

私は花畑の中でウトウトお昼寝。

しあわせ。

あったかい。

きもちいい。

天国はきつとこんな感じ。

きつときつとこんなにもきもちいい。

しあわせ。

なんとゆうしあわせ。

夢の中で私は

もうこれが夢だとゆう事に気付いていた。

お願い。

さめないで。

このままどうか、このままどうか、

私を光につつま込んで、溶かして。

さめてしまつたらもうそこには何も無い。

抜けがらの私だけ。

花畑はもうない。

きのうと同じ私がそこにいるだけ。

なにもない。

光なんてどこにもない。

惨めで腐った私がいるだけなのよ。

可哀想でしょ？

見てられないでしょ？

神様

神様

いるならお願い。

このまま永遠に夢を見させ続けて。

目覚めた時

私は部屋の天井を見つめながら、

ポツリと呟いた。

自分の愚かさを、

実感するために。

「誰かあたしの人生代わりに生きてよ。」
私の身代わりになればいい。